

## プレスリリース 2011年1月7日

報道関係各位

(お問い合わせ先)  
神奈川歯科大学  
社会歯科学講座歯科医療社会学分野  
准教授 山本龍生  
電話：046-822-8838  
Eメール：yama\_tatsu@kdcnet.ac.jp

### 歯を失うと認知症のリスクが最大 1.9 倍に ～厚生省研究班が愛知県の高齢者 4425 名のデータを分析～

平成22年に、日本福祉大学の近藤克則教授を主任研究者として、歯の状態と認知症発症の関連を分析しました。内容は以下の通りです。

2003年に愛知県の65歳以上の健常者を対象に郵送調査をし、その後4年間にわたり認知症の認定を受けたか否かを追跡しました。その結果、年齢、治療疾患の有無や生活習慣などに関わらず、歯がほとんどなく義歯を使用していない人、あまり噛めない人、かかりつけ歯科医院のない人は、認知症発症のリスクが高くなることが示されました。特に、歯がほとんどないのに義歯を使用していない人は、20本以上歯が残っている人の1.9倍、認知症発症のリスクが高いことがわかりました。

この研究は、平成22年度の厚生労働科学研究として実施しました。

#### <背景>

認知症の人は歯の状態も良くないことが知られている。認知症になると歯の手入れがおろそかになり、歯の状態が悪くなることもあるという報告もある

一方で、歯を失うことや歯周病によって、糖尿病や心疾患など、全身の健康状態に影響が現れることが明らかになってきた。

しかし、歯の状態が認知症に影響するかについてはわかっていなかった。

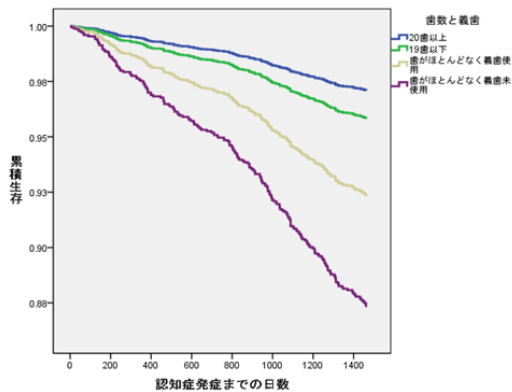
そこで歯の状態、かかりつけ歯科医院の有無と認知症発症との関係を明らかにすることを目的として追跡調査を行った。

#### <方法>

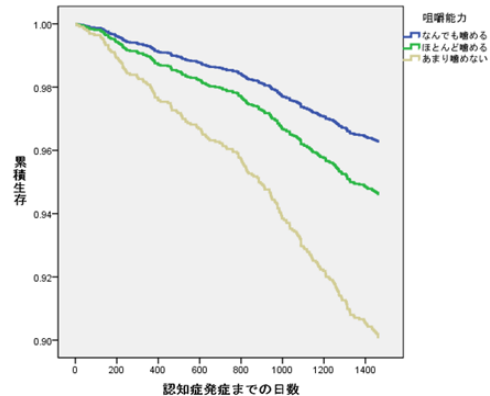
AGES (Aichi Gerontological Evaluation Study, 愛知老年学的評価研究) プロジェクトの一環として、2003年に愛知県に居住する65歳以上の健常者を対象としてアンケート調査を行った。そして、4年間追跡できた4,425名の要介護認定データを用いて、認知症が発生するまでの日数と、歯数、咀嚼能力およびかかりつけ歯科医院の有無との関係を検討した。

#### <結果>

調査期間中に認知症を伴う要介護認定を受けた人は220名(5.0%)であった。認知症発症者の割合は、歯数が少ない人ほど(図1)、咀嚼能力が低い人ほど(図2)、そしてかかりつけ歯科医院がない人ほど(図3)高くなった。



←【図1】 歯数・義歯と認知症発症までの日数との関係（累積生存：認知症でない人の割合）



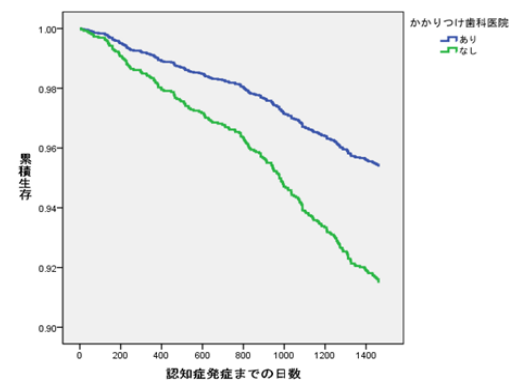
→

【図2】

咀嚼能力と認知症発症までの日数との関係（累積生存：認知症でない人の割合）

→【図3】

かかりつけ歯科医院の有無と認知症発症までの日数との関係（累積生存：認知症でない人の割合）



認知症発症に影響する年齢，治療疾患の有無や生活習慣（飲酒と運動）を考慮し，リスクの度合いを計算すると，20 歯以上の人に対して歯がほとんどなく義歯未使用の人の認知症発症リスクは 1.9 倍，なんでも噛める人に対してあまり噛めない人のリスクは 1.5 倍，かかりつけ歯科医院のある人に対するない人のリスクは 1.4 倍であった。

#### <研究の意義>

歯を失うことや噛めなくなることによって認知症発症リスクが高まることが示された。歯を失う原因となる歯周病などの炎症が直接脳に影響を及ぼすこと，噛めなくなることによる咀嚼機能の低下が脳の認知機能の低下を招いている可能性が示唆される。

かかりつけ歯科医院の有無については，歯科疾患の予防や治療を通じて直接的または間接的に認知症の予防につながっている可能性がある。

これは，厚生労働科学研究のうちの，長寿科学総合研究事業の一つとして行われている「介護保険の総合的政策評価ベンチマークシステムの開発（平成22年～平成24年）」における研究成果である。

#### 学会発表（予定）

山本龍生，近藤克則，平井寛，中出美代，相田潤，埴淵知哉，平田幸夫. 現在歯数、咀嚼能力およびかかりつけ歯科医院の有無と認知症を伴う要介護認定との関連：AGES プロジェクトのコホートデータによる分析. 第21回日本疫学会学術総会（平成23年1月21日，札幌市）. 報道は1月21日以降にお願いします.